

氏名(本籍)	さとう きくいちろう (群馬県) 佐藤喜久一郎		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第3578号		
学位授与年月日	平成17年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	歴史・人類学研究科		
学位論文題目	「上野神話」の近世の変容 - 『神道集』『大成経』『羊太夫』伝説の歴史叙述 -		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	真野俊和
副査	筑波大学教授	博士(文学)	古家信平
副査	筑波大学教授	博士(文学)	山本隆志

論文の内容の要旨

本論文は上野国における神仏にかかわるさまざまな在地縁起を、「上野神話」という概念でとらえ、それらの近世の変容を考察するものである。具体的には室町時代の『神道集』が近世以降に改変・書写された「在地縁起」、およびそれと並行して存在した上野国の宗教的・歴史的諸言説等を取り上げ研究の対象とした。全体は序論、結論を含めて6章で構成されている。

序論「『上野神話』という概念」では、「上野神話」という概念の内容と本論文における方法が論じられた。著者は上野国の神々にかかわる、中世から近世にかけての言説の総体をこの概念によってとらえとし、とりわけ室町時代の『神道集』に含まれた物語的縁起が近世以降に改変・書写されるにあたってどのような力が働いていたのか、という問題を扱うとしている。

第一章「上信境界地域における歴史叙述の形態-碓氷峠における『佐太夫』伝説-」では、碓氷峠をめぐる語られた物語をとりあげ、近世的歴史叙述の特性について論じた。著者は、碓氷峠とは上野国において周縁に位置する空間であり、この土地の周縁性は、貴種流離譚と「山賊」の伝承とに顕著であることを指摘した。物語における「山賊」とは、貴種に試練を与えたり助力者となるべき存在であった。しかし近世に入り、家の由緒を語る叙述において「山賊」像は変容した。「山賊」はむしろ近世的な諸価値への反抗者として描かれるようになったと著者は述べる。すなわち由緒の歴史叙述には、それ以前の社会であった中世社会を否定し、近世社会の平和を言祝ぐ傾向があったのであるとする。

第二章「物部神道と上野-長野采女と榛名神道-」では、近世初期に上野国出身の知識人らによって編纂された『大成経』なる書物の成立と背景、およびその影響について論じた。著者はその中心となった長野采女なる人物について、長野家の新たな史料を用いて実像を明らかにすることに成功した。即ち『大成経』編纂が上野国武士層の歴史認識と密接に関係していたこと、中世以来の上野国武士層には自らを石上・物部氏と位置付けてきた集団があったこと等を述べ、長野氏もその集団の一員であり、自身のアイデンティティの追求が『大成経』編纂につながったのであるとした。また、近世初期の上野国出身兵学者の活躍に着目して、『大成経』の三教鼎立思想が、近世国家秩序を支える武士的イデオロギーとしての側面を有していたことも明らかにした。

第三章『上野神話』の特質とその変容』では、『神道集』に収録された「那波八郎大明神事」を取り上げた。著者はこの物語の性格を、甘楽郡方面の在地神話であり、在地武士の小幡氏による上野国の統治を言祝ぐ「お伽草子」的な物語でもあったと規定する。そしてまず中世におけるこの物語の起源が論じられ、その原点が、上信国境地帯の隠れ里を舞台とする供儀譚にあったこと、小幡氏周辺の宗教家によってその供儀譚が上野国全体に関わる神話へと改変されていったと述べた。その過程でこの物語は、小幡一族の後裔を称した人々に宗教的権威を付与する機能を持ったこと、物語の担い手となった知識層とは、農村部に居住していた兵法家的・浪人的人物たちであったことが明らかにされた。さらに著者は、「那波八郎大明神事」の近世化の過程でその信仰的基盤を継承したものとして、「お菊」伝説の発展を取り上げた。両者はともに御霊信仰の基盤に立脚した物語であったとするが、お菊の物語の陰惨な内容、社会的弱者である「下女」への共感等、質的な差異に注目し、そこに上野神話の近世の変容が認められるとした。

第四章「歴史叙述としての『多胡碑』－『羊太夫』伝承の分析－」では、「羊太夫」の伝説をとりあげた。「羊太夫」の物語は『神道集』を初出とするが、近世になると、小幡氏の物語として発展し、小幡氏旧臣の由緒、「多胡碑」祭祀、「物部神道」などとの関わりが生まれたとする。すなわち「羊太夫」伝説は小幡一族において重視された御霊信仰の一つであり、その墓所とされた「多胡碑」の祭祀・管理については小幡一族の白倉家が行っていたとされた。また書写・流布された『羊太夫物語』は、小幡氏旧臣を称した家の「由緒」の内容にも影響を与えた。しかし近世後期～幕末ころになると、以上の「羊太夫」伝説の近世的性格に新たな側面が見られるようになったという。さきの「多胡碑」は中央の知識人たちによって日本を代表する金石文と見なされるようになり、古代の遺物として博物的・歴史的・美術的価値を付与された結果、「羊太夫」も、「多胡碑」碑文にその名を留めた歴史上の人物であったと見なされるようになり、小幡氏との関係は次第に否定されていった。一方、宗教的権威が低下した小幡氏側については、「物部神道」に国学的解釈を加味することで復権を目指した様相が描かれた。

「結論」において著者は以上の論述を次の二点に総括した。第一に、「上野神話」の近世の変容とは「中世神話」の合理化の過程、すなわちそれまでのお伽草子の物語の、より歴史的な「在地縁起」への語り替えにほかならなかったという。そして縁起伝来の事実自体が家の「由緒」を示す標識となり、あるいは縁起の内容が「由緒」に取り入れられ、歴史的な物語として解釈されるようになっていったと述べた。第二には、宗教的言説の担い手が自ら中世武士層の後裔を称するようになったことも近世的特質であったという。近世になると、宗教そのものよりも、歴史的な権威や「由緒」に宗教的価値を置く傾向が顕著にみられるようになってきたのであったと著者は主張した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

以上本論文は、かつて上野国において語られた神々の物語の性格とその変容過程を、その地域性と歴史性とを踏まえながら論じた意欲作である。その学術的意義は次のようにまとめることができよう。

第一は、広範な資史料の発掘である。本論文で扱われた資史料の多くは著者自身によって発見され、翻字されたものである。「那波八郎」「羊太夫」および榛名山に関する在地縁起の諸本、「由緒」にかかわる家伝文書、社寺文書など活字化されていない原史料から、発刊部数の極めて少ない私家本に至るまで、多くの資史料が著者の精力的な調査によって公のものになった。さらにそれらの史料が量の裏付けをもつことによって、諸史料の間の関連を見出しうることもなった。この分野の研究の進展にとって、著者の貢献はこのうえなく大きい。

第二は、上野国という現実に存在する地域社会との関連において縁起を捉え得たことである。従来この分野の研究は文学研究の視点からのものが多かったため、テキストの読解には精細であっても、社会性への

関心がなおざりにされる傾向が強かった。著者は物語のテキストと家伝文書・社寺文書の双方に目を配り、相互の結びつきを考察することによって、現実の社会基盤の上でテキストを解釈することに成功した。神仏の縁起物語の研究にとって、著者の採用した方法は画期的なものであるとあってよい。

第三は、中世の物語と近世の物語との間の連続・不連続の様相をあきらかにし得たことである。従来の研究ではそれぞれの時代の物語をそれぞれの時代の中で論じるにとどまっていたが、著者の視点はそれが近世社会に引き継がれたとき、どのような方向に変容していくか、という点にあった。そのような方法が可能になったのは、物語の担い手を明らかにしたことによっているとあってよい。この点も従来の研究方法をはるかにしのぐものであったと評価できる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。